

## 官原勇教授のご業績について

鈴木 真

官原勇先生は京都大学文学部哲学専攻において研究をはじめられた。その時点でこの哲学研究室には辻村公一教授がいらっしやり、また教養部の方には着任されたばかりの竹市明助教授がいらっしやった。ハイデガー研究で著名なこの二人の研究者を含め、当時の京都大学では現象学を専門とする研究者・大学院生の層が厚かった。若いときから独立心が旺盛であられた官原先生は、この環境の中で、フッサールを中心とした研究に邁進された。先生がフッサール研究を選択されたのは、もともと数学にご興味がおありで、その後その基礎への関心から哲学に向かわれたからかもしれない。

官原先生の深く広いご教養やその「学者力」から推察できるように、先生は学部生の頃からドイツ語の語学力は抜群で、非常な勉強家であられたと聞き及んでいる。それもあってか、先生は博士後期課程を研究指導認定退学されたわずか3年後に最初の主著である『現象学の再構築』（1988）を公刊されている。これは当時としては異例の早さである。京都大学の伝統は原典精読主義で、多くの研究者は「某における○○」というような論稿を生産していたのだが、官原先生のこの著書はフッサールやハイデガーの単なる解釈書ではなく、文字通り超越論的現象学の立場を批判に耐えうるよう再構築されようとした意欲作である。先生は本書で、現象学の主要文献の精読に基づきつつも、分析哲学における言語分析や精神医学にまで目を向けて、超越論哲学や現象学的志向性理論を擁護するとともに、志向作用や認識・行為主体や言語表現の意味の同一性や身体的位置づけについてご自分の見解を提示しようとしてされている。なお超越論的現象学の課題は、認識主観によって経験的対象が構成されているとみなし、その主観を反省することによってそれが持つ志向的諸機能を解明することだとされている。この著書におけるフッサール解釈とそれを引き継ぐ先生のお立場の一つの特徴だと私に見えるものは、志向的作用として（対象の存在様態を指定する機能というよりも）意味付与の機能の方を強調することである。この意味付与機能の重視は、言語への反省へと先生を促し、次の『ディアロゴスの現象学』におけるコミュニケーション分析や後の認知言語学研究へとつながったように見える。

次のご主著『ディアロゴスの現象学：対話的言語行為の構造と原理』（1998）では、『現象学の再構築』で重要だが扱えなかったテーマとして挙げられていたもののうち、相互主観性や生活世界をめぐる問題が、言語コミュニケーションの分析と関連して論じられている。ここで宮原先生は、特に 20 世紀ドイツ哲学における言語論的転回と「倫理的転回」に直面して格闘されている。先生は、これらの転回から、人間存在の本質的歴史性、現実の生活世界の相対性、フッサールにある独我論的傾向の批判、理性の働きを他者との自由な対話・相互承認のうちに見出す視点、理論理性と実践理性を統一的に扱う方向性などをくみ取られている。しかし、言語論的転回が言説の適切性を完全に言語運用内部の問題としてしまい、相対主義的な理性観を支持する傾向がある点には反対される。そして、言語コミュニケーションの背後にそれを支えるものとして志向性があり、その超越論的現象学的な分析には意義があることや、人間理性の自己批判の徹底化による哲学的言説の普遍的な根拠づけの試みには望みがあることを論じられている。現象学だけではなく、ガダマーの解釈学や、ハーバーマスやアーペルの言語遂行論、その淵源であるカントの倫理学理論（とりわけ、根本悪についての議論）とも縦横に切り結んだこの著作は、言語論的転回以後の哲学が目指すべき理性論の輪郭を描こうとした野心作である。言語コミュニケーションは意味の同一性を要請するが、これは言語遂行・解釈行為の主体における意味の「反復的現前による自己同一性」の確保によって実現するのであり、あるべき現象学はこれを分析の基盤とするのだ、という趣旨の主張が私には新鮮であった。宮原先生はこの著作の元になった論文で論文博士を取得されているが、その論文調査委員による講評は、「言語哲学をモチーフとするロゴス論という主題にふさわしい、幅広い視野と、批判的な精神にもとづいた議論の積極的な展開」がなされている、というものであった。

このうち宮原先生は、『現象学の再構築』で重要だとしながら扱われなかったテーマである時間論の議論を展開されたり、認知言語学、とりわけラネカーの研究を現象学と結び付けようとする研究を進められたりした。時間論に関してアリストテレスやアウグスティヌスの議論を扱われたりしているのは（「哲学における時間論の系譜—アリストテレスとアウグスティヌス—」（2019））、先生が現代の哲学的課題に取り組まれながらも哲学史を重視されていたことのあらわれである。なお、特に後者の認知言語学関連の研究で顕著なように、宮原先生のご論文は必ずしも純粋な意識哲学の実践には見えないので、先生がフッサール現象学の研究から出発されたことを考えると

一見意外に思う者がいるかもしれない。しかし、言語的転回以後の現象学を唱道する宮原先生の観点からは、これが適切な方法論なのであろう。先生のお考えによれば、フッサールの志向性の分析も、結局は私たちが発話する認知文を手かがりにしており、直接的な内観的分析というよりは、認知文の意味論的・統語論的分析と反省により、有益な洞察が得られるのである。

こうして宮原先生は、現象学を中心に、日本における現代ドイツ哲学研究を牽引されてきた。ここで先生の御研究の一般的な性格や傾向や方法論について、もう少し述べておこう。『現象学の再構築』のあとがきには、哲学とは「人間存在の解明と世界の意味への問いという相互に絡み合った営み」であって、それは「〈意味を問う存在者としての人間の自己反省〉とならざるをえない」、と記されている。先生がこの哲学の定義を提示されたのは30年以上前のことになるが、ご業績表を拝見するにつけても、先生が取り組まれた哲学の問題と方法論の基本をよく表しているように見える。

宮原先生は、演習でカントのテキストとともにハイデガーのテキストを扱われることが多かったが、ハイデガーとフッサールの対立点ではどちらかというフッサールの側を擁護されることが多かったように思う。たとえば、フッサールが物理的対象の感性的経験が根本的だとみなすのに対し、ハイデガーはこれが抽象の産物であって、道具としての「手元存在」の経験の方が根本的だと批判しているが、『ディアロゴスの現象学』（22頁）では宮原先生はフッサールの側を支持しているようにみえる。もちろん先生はハイデガーを高く評価されており、たとえば『現象学の再構築』（64-76頁）では、フッサールによると「表象」という対象意識の方が「態度決定」を基礎づけることになっているが、実際はハイデガーのいうように目標設定とその実現を図る未来志向的意志作用が志向性のシステムを支えていると論じられている。いずれにしても、先生の研究の基盤が大学院生時代から研究されたこの二人の現象学者の思想にあることは疑いない。

先生の方法論の特徴の一つは、図形を利用して思考されるということかもしれない。「空間的位置の指示と「主観化」— 認知言語学と現象学の交差するところ—」（2015）のような研究論文では多くの図が効果的に使用されているし、大学で使用されるテキストとして作成された、『図説・現代哲学で考える〈表現・テキスト・解釈〉』（2004）や『図説・現代哲学で考える〈心・コンピュータ・脳〉』（2004）では、この図形を用いて思考するという方向性が教育にも生かされているのがわかる。

ちなみに、先生は後者のテキストではどちらかという科学に親和的な分析哲学系の心の哲学の内容を紹介されており、超越論的現象学の立場に立たれながらも、認知科学や分析哲学の研究も貪欲に取り込もうとされていたことがわかる。それでも先生が翻訳をされたジョン・サールの『ディスカバー・マインド!: 哲学の挑戦』(2008)の「訳者解説」などを読むと、現在の分析哲学で支配的な物理主義に対する批判と強いAIに反対するサールの議論への共感を示されており、先生の基本的なお立場がまったくぶれていないことは明らかである。なおサールの原本は英語の文献だが、先生は秀でた語学力を生かしてドイツ語文献の翻訳も多くされていた。

宮原先生の教育的な影響についてももう少し触れておくと、先生は上の二つのテキストの執筆や翻訳のほかに、『ハイデガー「存在と時間」を学ぶ人のために』(2012)の編著者もされていた。私は、この定評のあるテキストを読んで受験してくる編入学入試の受験者の志望動機書を何枚も読んだものである。このほか先生はカルチャーセンターで教えられており、そこから研究生や大学院生を志す社会人もいた。

宮原先生が名古屋大学に在職された13年間に恩顧を受けた大学院生は数多い。先生はその指導において自主性を重んじられた。論文の形式や文献の基本的な読解については厳格であられたが、それを超えた解釈や理論構築の次元では、先生の御解釈と違う解釈を学生がしても、非常に異なるアプローチをしても、それを止めようとはなさらなかった。学生が自分で問いを立てる能力や、様々な視点から自主的に考える力を育てることを重視されていたように見える。思うに、このような学生の自由の尊重というご態度の背後には、大学院生の時代に思索を自力で切り開き深められた経験があるのかもしれない。また先生は留学生が不自由なく研究できるようにご配慮されていたが、この気遣いも先生がフンボルト財団の基金でドイツに留学された際に苦勞された経験に裏打ちされていたのではないかと思う。

私が宮原先生と親しくお話しすることができたのは、名古屋大学に赴任してからの3年間にとどまる。しかしその間に様々な点で不勉強で教養のない私に色々ご教授いただき、哲学という営みの視野を広げていただいた。私自身は分析哲学を学び、哲学と科学の認識論的・存在論的連続性を主張する自然主義の立場をとっているので、宮原先生のお立場からすれば根本的に間違っていると言われても仕方がない。しかし先生からは、超越論哲学や現象学の立場より哲学の研究課題がいかにつまみえられ、それがどのように追究されるのかについて、折々にさせていただいたお話や、演習や口述試

験における学生に対するコメントを通じて、多くを学ばせていただいた。ご退官されるのは本当に残念である。学生や私へのさらなるご指導ご鞭撻をお願いするとともに、先生の今後のご健康とご活躍を祈念するものである。

## ご経歴・ご業績

### ご職歴

昭和 60 年 4 月

京都大学文学部研修員

昭和 60 年 7 月

愛知県立大学文学部(一般教育学科) 講師

昭和 63 年 10 月

愛知県立大学文学部(一般教育学科) 助教授

平成 7 年 10 月

愛知県立大学文学部(一般教育学科) 教授

平成 10 年 4 月

愛知県立大学外国語学部(ドイツ学科) 教授

平成 20 年 4 月 1 日

名古屋大学 大学院文学研究科 教授

平成 29 年 4 月 1 日

名古屋大学大学院人文学研究科 教授 (令和 3 年 3 月 31 日ご退職)

## ご学歴

昭和 57 年 3 月 京都大学大学院文学研究科修士課程哲学専攻 修了

昭和 60 年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程哲学専攻 研究指導認定退学

平成 9 年 3 月 京都大学 博士 (文学)

## 所属学会:

日本哲学会、日本倫理学会、比較思想学会、日本現象学会(全国選出委員、企画実行委員長、機関誌編集委員長)、中部哲学会(委員会委員、委員長)、関西哲学会(選出委員)、名古屋大学哲学会(委員会委員、委員長)

## ご業績

### 著書 (単著、分担執筆)

1. 鍋島弘治朗、楠見孝、内海彰編『メタファー研究 2: 特集 時間のメタファー』ひつじ書房、2019 年、分担執筆: 「哲学における時間論の系譜—リストテレスとアウグスティヌス—」、1-26 頁
2. 松澤和宏編『21 世紀のソシユール』水声社、2018 年、「記号と概念—現象学的認知主義からのソシユールの『一般言語学講義』の考察—」、125-138 頁
3. 宮原勇編『ハイデガー「存在と時間」を学ぶ人のために』世界思想社、2012 年、序論「ハイデガーの根本的視座」、3-33 頁
4. 竹市明弘、小浜善信編『哲学は何を問うべきか』晃洋書房、2005 年、第三章「理解と歴史」、133-152 頁
5. 『図説・現代哲学で考える<心・コンピュータ・脳>』丸善株式会社、2004 年、154 頁
6. 『図説・現代哲学で考える<表現・テキスト・解釈>』丸善株式会社、2004 年、

151 頁

7. 竹市明弘・渡辺雄三・早川勇編『心とコミュニケーション—精神環境の探求—(人間環境学シリーズ (2))』勁草書房、1999 年、分担執筆:「言語と沈黙—沈黙はどのような機能を果たしているか—」、185-195 頁
8. 『ディアロゴスの現象学: 対話的言語行為の構造と原理』晃洋書房、1998 年、iv, 221 頁
9. 竹市明弘・坂部恵・有福孝岳編『カント哲学の現在』世界思想社、1993 年、分担執筆:「現象学の中のカント—二つの「統覚」概念—」、17-35 頁
10. 新田義弘・常俊宗三郎・水野和久編『現象学の現在』世界思想社、1989 年、分担執筆:「身体—受肉せる主体—」、111-139 頁
11. 『現象学の再構築』理想社、1988 年、246 頁

翻訳

1. U.ビュヒナー-レーマー著『ファニー・メンデルスゾーン=ヘンゼル: 時代に埋もれた女性作曲家の生涯』春風社、2015 年、共訳者:米澤孝子、246 頁
2. J.サール著『ディスカバー・マインド!: 哲学の挑戦』筑摩書房、2008 年、単独訳、415 頁
3. ペゲラー編著『ハイデガーと実践哲学』法政大学出版局、2001 年、担当: K.ヘルト「哲学の現代的状況—根本的気分についてのハイデガーの現象学—」127-167 頁
4. 竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学』産業図書、1992 年、担当: K.ハルトマン「超越論的議論」127-163 頁、J.ヒンティッカ「超越論的認識のパラドックス」259-300 頁、J.H.モハンティ「ヒンティッカ論文に対する論評」301-309 頁、H.ポーザー「論理的言語ゲームの意味論は超越論的か」309-316 頁
5. H.シュミッツ著『身体と感情の現象学』産業図書、1986 年、担当:「身体性の現象学」33-94 頁
6. M.リーデル著『解釈学と実践哲学』以文社、1984 年、担当:「現代哲学における解

积学的転回」17-67 頁、

7. 新田義弘、小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房、1978 年、担当: M.ミュラー  
「現象学の歴史的 position」2-20 頁

学術論文 (全て単著)

1. McTaggart のテーゼ: 「時間の非実在性」の真の意味、名古屋大学哲学会編『名古屋大学哲学論集 田村均先生ご退職記念特別号』、165-179 頁、2018 年 3 月

2. The Mental Lexicon and the Architecture of Encyclopedia, *Journal of the School of Letters* 13, Nagoya University, pp. 27-43, 2017-03.

3. 言語コミュニケーションの基盤としての相互主観性、名古屋大学哲学教室編『哲学フォーラム』13、79-90 頁、2016 年 3 月

4. 認識とカテゴリーについて、名古屋大学哲学教室編『哲学フォーラム』12、52-81 頁、2015 年 3 月

5. 時間と生をめぐって—ハイデガーとフッサール—、ハイデガー・フォーラム編『Heidegger-Forum』9、1-18 頁、2015 年 3 月

6. 空間的位置の指示と「主観化」—認知言語学と現象学の交差するところ—、名古屋大学哲学会編『名古屋大学哲論集』12、1-19 頁、2015 年 3 月

7. フッサール初期時間論の基本概念とアポリア(1)、名古屋大学文学研究科編『名古屋大学文学部研究論集』61、45-73 頁、2015 年 3 月

8. 時間に関する現象学的・認知言語学的考察、名古屋大学哲学教室編『哲学フォーラム』11、61-84 頁、2014 年、3 月

9. 原子力時代の哲学知: ハイデガーを手がかりに、関西哲学会編『アルケー: 関西哲学会年報』21、14-25 頁、2013 年

10. Subjectification について—現象学の立場からの考察—、ことば工学研究会編、『ことば工学研究会: 主観性とは?』37、59-61 頁、2011 年



11. 主観の解体と自己の探求、中部哲学会編『中部哲学会年報』 43、29-47 頁、2010 年
12. 認知言語学の哲学的基盤—現象学の立場から—(第 10 回日本認知言語学会シンポジウム)、『日本認知言語学会論文集』 10、631-645 頁、2010 年
13. 認知言語学と現象学的言語論の可能性—イメージ・スキーマ理論と志向性分析の統合の試み—、名古屋大学哲学会編『名古屋大学哲学論集』 9、1-25 頁、2009 年 4 月
14. 情報とコミュニケーション(シンポジウム:情報とコミュニケーション)、中部哲学会編、『中部哲学会年報』36、41-59 頁、2004 年
15. 直示詞の機能と意味(その 1) —フッサール『論理学研究』第一研究の根本的問題点—、フッサール研究会編『フッサール研究』 創刊号、2003 年 3 月
16. 伝統文化とモダニティー (課題研究: 伝統文化と近代化)、関西哲学会編『アルケー: 関西哲学会年報』 11、162-175 頁、2003 年
17. 認知と言語についての新たな現象学—認知言語学と生態学的知覚論との対決を通じて—、『理想(特集 現象学の新しい転回)』理想社、667、66-78 頁、2001 年
18. 類似性とカテゴリー—認知言語学での「カテゴリー化」(categorization)の理論とその批判的検討—、関西哲学会編『アルケー: 関西哲学会年報』8、12-22 頁、2000 年
19. 自律的個人の存立基盤を問う、21 世紀の関西を考える会編『あうろーら』8、28-36 頁、1997 年
20. 「実存」の根拠と悪の問題、京都大学大学院人間・環境学研究科、総合人間学部『人間存在論』刊行会編『人間存在論』 3、89-102 頁、1997 年
21. 心身二元論とその前提、中部哲学会編『中部哲学会紀要』 28、15-27 頁、1996 年 3 月
22. 理性と根本悪、京都大学 大学院人間・環境学研究科、総合人間学部『人間存在論』刊行会編『人間存在論』 2、31-41 頁、1996 年 3 月
23. ロゴスと歴史性—ガダマー解釈学の再構成の試み—、『愛知県立大学文学部論集

(一般教育編)』 45、123-152 頁、1996 年

24. ディスクルのロゴスと行為のパトス、京都大学大学院人間・環境学研究科、総合人間学部『人間存在論』刊行会編『人間存在論』 1、123-136 頁、1995 年 3 月

25. Communicative Universals, in *The Monist* (An International Quarterly Journal of General Philosophical Inquiry), vol.78, no.1, Illinois, U.S.A., 1995, pp.30-40.

26. 現代ドイツの言語遂行論的哲学—ハーバーマスとアーペル—、河上倫逸編『歴史と社会』 14、リプロポート、303-333 頁、1993 年 1 月

27. 『聖なるもの』の現象学—宗教現象学についての方法論的考察—、日本現象学会編『現象学年報』 5、75-91 頁、1990 年 3 月

28. 「コミュニケーションの現象学」の理念、『愛知県立大学文学部論集（一般教育編）』 38、1-21 頁、1990 年 2 月

29. 現象学の再構築に向けて、日本哲学会編『哲学』 39、 61-77 頁、1989 年 4 月

30. 志向性と個体の同一性—フッサール現象学の新展開—、『理想』理想社、634、73-88 頁、1987 年 4 月

31. 現象とロゴス、中部哲学会編『中部哲学会会報』 19、11-22 頁、1986 年 3 月

32. 経験の枠組と「意味」—超越論哲学のフッサールの形態—、『理想』理想社、632、138-149 頁、1986 年 1 月

33. 人間存在と超越論的問題設定—ハイデッガーをめぐって—、『理想』理想社、626、216-228 頁、1985 年 7 月

34. 認識の根底にあるものへの問い—フッサールにおける自我の問題—、関西哲学会編『関西哲学会紀要』 19、57-62 頁、1985 年 2 月

35. 『論理学研究』における普遍認識の問題、京都大学哲学論叢刊行会『哲学論叢』 11、55-64 頁、1984 年 7 月

36. 志向性・自我・身体—言語分析と現象学の接点—、『理想』理想社、612、210-224 頁、1984 年 5 月

37. 志向性—述定作用の背後にあるもの—、日本哲学会編『哲学』34、162-172 頁、1984 年 5 月
38. 超越論哲学としての現象学の可能性—フッサールにおける意味と形相の概念について—、日本倫理学会編『倫理学年報』33、69-83 頁、1984 年 3 月

その他の執筆

1. 『中部哲学会年報』第 50 号にあたって、中部哲学会編『中部哲学会年報』50、1-4 頁、2019 年 7 月
2. 第 28 回日本現象学会研究大会報告、日本現象学会編『現象学年報』23、27-29 頁、2007 年
3. 現象学とエポケー—フッサールはデカルトの徒なのか、ピュロンの徒なのか—、京都大学出版会『西洋古典叢書月報』63、1-4 頁、2006 年 8 月
4. 書評: 河村次郎著『意識の神経哲学』萌書房、『図書新聞』(2719)、2005 年 3 月
5. コミュニケーションにおける相互人格的承認、京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成—新たな対話的探求の論理の構築 Newsletter』11、4-6 頁、2004 年
6. 書評: 小川侃著『風の現象学と雰囲気』晃洋書房、『人環フォーラム』11、65 頁、2001 年 9 月
7. 論評: 丸山真男著『現代政治の思想と行動』、21 世紀の関西を考える会編『あろろーら』(特別号)、119-123 頁、2000 年 12 月
8. 特集「認知と言語」について (特集 認知と言語—認知言語学の新しい流れと現象学—)、日本現象学会編『現象学年報』15、1-6 頁、1999 年
9. 廣松涉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店、担当:知識、1998 年 3 月
10. 論文: Communicative Universals (in: *The Monist*)の Abstract, in: *Review of Metaphysics* (A Philosophical Quarterly), 48(4), pp. 959-960, 1995-06.

11. 木田元他編『現象学事典』担当: 認識、意味志向/意味充実、意味付与、一義性/多義性/複義性、形成体、指標と表現、孤独な心的生活、相関関係、存在定立、レール/イデアール、レール/イデール、1994年3月
12. 海外哲学展望: 新たな進化論的認識論—ハンス・モーアの試み、『理想』理想社(635)、140-143頁、1987年7月

口頭発表(すべて査読、ないしは招待)

1. ハイデガーへのフッサールの応答から見えるもの、第70回関西ハイデガー研究会、京都大学大学院人間・環境学研究科、2019年12月
2. “Japan and the Cultural Disarmament of Philosophy:” *The European Network of Japanese Philosophy (ENOJP)*, The Second ENOJP Conference, Univesité libre de Bruxelles (ULB) in Brussels, Belgium, 2016-12.
3. Destruction of Subject and Quest for Self: The Fundamental Differences between Nishida and Watsuji, in: *The European Network of Japanese Philosophy (ENOJP) The Second ENOJP Conference*, Univesité libre de Bruxelles (ULB) in Brussels, Belgium 2016-12.
4. 主観の解体と自己の探求、比較思想学会東海地区研究会、2016年7月
5. 時間と生をめぐって—ハイデガーとフッサール—、ハイデガー・フォーラム、第九回大会、東洋大学、2014年9月
6. 原子力時代の哲学知: ハイデガーを手がかりに (課題研究/科学技術文明と哲学知)、関西哲学会第六十五回大会、2012年10月
7. 認知言語学の哲学的基盤—現象学の立場から(共通テーマ:認知言語学の科学的・哲学的基盤)、日本認知言語学会第10回全国大会、シンポジウム提題者、京都大学吉田キャンパス、2009年9月
8. コミュニケーションにおける相互人格の承認、京都大学大学院文学研究科 21世紀COEプログラム 『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成 新たな対話的探求の論理の構築』第12回研究会、会場:京都大学、2004年7月

9. ハーバーマスに対する特定質問者、ハーバーマス・シンポジウム『正義と法と民主制のディスクルス』主催: 比較法制研究所、1993年3月
10. *An Idea of the Phenomenology of Communication, Japanese / American Conference on Phenomenology*, Seattle University, U.S.A. 1991-03.
11. 現象学の再構築に向けて、日本哲学会 第 48 回大会、会場:上智大学、1989年5月
12. 現象とロゴス、中部哲学会年次大会、会場:南山大学、1986年9月
13. 意味の諸相(シンポジウム「意味の問題」提題)、日本現象学会第8回大会、会場:大谷大学、1986年5月
14. 認識の根底にあるものへの問 —フッサールにおける自我の問題—、関西哲学会 第37回大会、会場:徳島大学、1984年10月
15. 現象学的自我論の再検討、日本現象学会第5回大会、会場:東京大学、1983年5月